

# 生と言語

—— ブリス・パランとモーリス・ブランショ ——

## 門 間 広 明

ブリス・パランは一八九七年生まれの哲学者であり、日常的エピソードを交えた独特なスタイルで言語の問題を論じ続けたことで知られる。モーリス・ブランショは一九〇七年生まれの、したがってパランより十歳若い批評家であり、個別の作品論や作家論だけでなく、文学そのものの条件をめぐる原理論を展開したことで知られる。この二人の著者の関係が研究者によって論じられたことはこれまでほとんどなかった<sup>(1)</sup>。しかし、両者の思想には多くの類似点があり、とりわけブランショは、文学における言語のあり方を探求するにあたって、パランの思想から多くの着想を得ているように思われる。以下、両者のテキストを突き合わせることでこの仮説を検証し、彼らの言語をめぐる考えの独自性を、両者の違いも含めて明らかにしてみたい。

### 1. 言語への不信

パランは一九四二年に、言語の問題を論じた二冊の書物、つまり

『言語の本性と機能についての研究』と『プラトンのロゴスについての試論』を出版しており、ブランショは四三年初頭に『ジュルナル・デ・デバ』誌にこの二冊の書評を寄せている。その書評の冒頭で、ブランショはこれらパランの著作がジャン・ポーランの『タルブの花々』を思わせるとし、また両者の議論がともに時代の「危機」に関わるものであることを示唆している。ブランショによれば、パランが論じたプラトンの時代と同じ危機、ある「本質的な不確かさ」に結びついた危機が現代を襲っている<sup>(2)</sup>。このように述べることで、ブランショは、その大部分は現代から遠い時代を論じているパランの二冊の書物を、きわめてアクチュアルな試みとして評価している。そしてそこで問題となっている「本質的な不確かさ」とは、まずもって言語の不確かさにほかならない。

事実、ポーランの『タルブの花々』とこれらパランの著作では、ともに言語の不確かさ、つまりその信用ならざる性格が問題となっていると見なすことができる。ポーランは言語に不信を抱く作家たちを「テロリスト」と名づけた。彼らは、言語はありのままの思考

や真正な観念をゆがめてしまうので、それを疑ってかからなければならぬと考える。それはポーランにとって、ここ一五〇年ほどの文学上の傾向である。しかしパランの『プラトンのロゴスについての試論』を読むなら、ポーランが語っているこの傾向は、すでに古代ギリシャにもあったかのように思われてくる。事実、プラトンは、言葉が正しい内容を伝えないことを嘆き、よって言語を信用してはならない、真正な知識を得るためには言語からではなくそれが名指している対象から出発すべきだと考えた。パランによれば、プラトンのこうした言語不信は「すべての対話篇に」見られるものである<sup>(5)</sup>。しかしプラトンは、ポーランの語るテロリストたちとは違って、言語そのものを否定しようとはせず、むしろ言語に真実を伝えうる確実さを与えようとした。

パランによれば、プラトンがとった解決法は次のようなものだった。「プラトンは、彼の同時代人たちのように言語を感性界の流出(emanation)と見なすことを次第にあきらめ、それを次第に知性界の写しという地位に高めようと試みるようになる<sup>(6)</sup>」。プラトンは、生々流転する感性界の事物ではなく、永遠不変なる知性界の写しとして言葉をとらえることで、言語に正しさを保証しようとした。それはまた、言語(ロゴス)を、言語を構成している諸要素(名)の総和から区別するという発想をともなっていた。そうすることによって、言語を構成するそれぞれの要素自体は感覚的なものであり、不確かさを逃れることはできないにしても、それらの総和から原理と

してのロゴスを区別し、「言語を知性的諸関係の体系として定義し、それを感性界から切り離す<sup>(7)</sup>」ことで、正しい知識の伝達を保証しようとした。言語はこうして、それ自体としては感覚的なものでありながら、イデアを分有することで知性界と私たちを媒介するものとなる<sup>(8)</sup>。

しかしパランは、結局のところ、プラトンの試みが成功したとは見なしていない。言語には、そしてそれをを用いる私たち人間には、互いに異質な二つの世界に属しているがゆえの曖昧さや不安定さが、どうしても残ってしまうからである。感性界と知性界のあいだの媒介物であることは、真実と誤りの両者に等しく開かれていることを意味し、それゆえ言語は真実だけを相手取るわけにはいかないのである。したがって、言語は「真実の源泉にして、同時に誤謬の源泉<sup>(9)</sup>」であらざるをえない。「誤りは身体からやってきて、真実は魂からやってくる。そして言語はそれら二つのあいだにある。言語は、身体によって曇らせられれば誤りの力になるし、世界の魂を表現するならば真実の力となる<sup>(10)</sup>」。こうして、言語に正しさを与えようとしたプラトンの努力にもかかわらず、言語の本質的な不確かさは私たちにどこまでもつきまとう。

このパランによるプラトン解釈を踏まえた上で、次にパラン自身が言語をどのように考えていたのかを見てみよう。

実のところ、パランもまた言語に深い不信を抱き、その欠陥を克服しようとした人だった。というのも、彼にとって、言語は生や実

存や肉体、つまり各人によって個別に生きられた体験と根本的に対立しているからである。「根本的な矛盾は、したがって、人は同時に生きることと話すことはできないということである」<sup>(11)</sup>とさえパランは言う。言語は生きられた現実をつねに裏切ってしまうがゆえに、信用のおけないものと見なされる<sup>(12)</sup>。

ではパランは、なぜ言語と生が相容れないものだと考えたのだろうか。その理由の一つは、「言語は現実的なものではなく、可能なものだけを表現する」<sup>(13)</sup>「言語は存在しているものを語るのではない。それは存在しうるものを語るのだ」<sup>(14)</sup>というものである。パランによれば、あらゆる命題はその反対の命題を可能性として含んでいる。「弁証法について」では、それは次のように説明されている。例えば「神は実在しない」という言明は、それが言葉で語られたものであるかぎり、「神は実在する」という言明を可能性として含んでいる。よって「神は実在しない」は、神の実在についてこれまで言われてきたことがもはや適切ではなく、その反対の言明によって置き換えられなければならない、ということしか意味していない。つまり、すべては言語の内部における転換でしかなく、そこで語られている対象は言語に依存してのみ存在しているにすぎない。このようにして、言葉は語っている対象を絶えず「可能なもの」に横すべりさせてしまうがゆえに、「存在するもの」の現実性には決して届かない。

## 2. 嘘と死

ところで、言語がつねに「可能なもの」を含んでいることは、人は言葉によって嘘をつくことができる、ということを意味している。可能なだけであるものを語りうるものが、嘘の条件にはかならないからである。嘘もまたパランの大きなテーマの一つである。とはいえず彼は、話す人間の悪意や狡猾さを問題にしているわけではない。問題なのは、言語そのものが嘘の可能性を含んでしまうことだからである。「この嘘の法に従っている者すべて、つまりは言葉を話す者すべて」<sup>(15)</sup>とパランは言う。したがって、実際に嘘をつくかどうか、その意図があるかどうかにかかわらず、言語を用いることはそのまま嘘の可能性を含む。パランはこの事実を重く受け止め、言葉から嘘を排除するためにはどうすればよいかを真摯に考え続けた。「今日私たちのただ一つの問題は、私たちがいかにして嘘を消し去ることに成功するかということである」<sup>(16)</sup>。人はつねに嘘をつくことができるということ、むしろ言語自体が嘘の可能性を含んでしまうということ、それはパランにとって、サルトルの言葉を借りれば、言葉が「病んでいる」ということにはかならなかった<sup>(17)</sup>。

しかしパランは、この問題を繰り返し論じながら、決定的な解決に到達することはなかった。というより、それを安易な仕方では解決してしまうことを拒み続けたのだ。さらに言えば、彼は、自分

が取り除こうとした言語の欠陥を、それを決して取り除くことができないことを身をもって示すことで、逆に言語の本質そのものとして浮かび上がらせているように思われる。彼は、言語がつねに嘘を含んでしまうことを嘆き、言葉によって真実を伝えることを追い求めた。しかし彼は、同時にその欠陥こそが言語の本質であることを、はっきり認めてもいる。パランはベルナル・パンゴーとの対話において、「実質的に、言語の歴史は嘘の歴史なのです」と語っている。パランの思考には、言語に確実性を与えようとする試みを通じて、逆に言語の本質がその不確実性にあることを明かしてしまうという逆説的な帰趨がみとめられる。そしてブランショは、パランがこうして否定的な仕方でも認めていること、認めざるをえなかったことからこそ、自らの思想にとって貴重なものを受け取っているように思われるのである。

ブランショは、一九四七年に発表されたパスカル論において、次のようにパランに言及している。「プリス・パランはそのエッセイの一つにおいて、芸術の真理は嘘であることを思い出させる。そしてさらに、芸術は死そのものとして現れ、死のイメージを私たちのなかに導き入れるのだと述べている」<sup>(19)</sup>。ここでブランショが参照しているのは、パランの『選択の迷い』に収められた「唯物論的弁証法批判」と題された論文であり、直接には、そこに読まれる「芸術はそこで、死そのものとして現れ、死のイメージを私たちのなかに導き入れる。そして科学の真実が誤謬の真実であるように、芸術が

私たちにもたらす真実は嘘の真実である」という一節である。ここでは二つのことが言われている。一つは芸術は嘘をその本質としているということ。もう一つは芸術は死と関わるものだという事。後述するように、これら二つのことは実は密接に結びついている。しかしまず、第一の論点から見よう。

ブランショが、パランの語る芸術と嘘の結びつきに注目したのは、それが彼自身の文学観にきわめて近いものだったからだと思われる。というのも、四〇年代のブランショは、素朴なレアリスムの立場を退け、嘘や欺瞞、あるいはフィクションや想像力という言葉で文学の条件を考えようとしていたからである。彼は、例えば、「詩は、存在から私たちを引き離すためのこの企てにおいて、欺瞞そして戯れである。必然的に、詩は私たちが騙すのだ。自己欺瞞と嘘は、詩の美点である」<sup>(20)</sup>、あるいは「残念ながら、フィクションの作品は誠実さとはなんの関係もない。それは騙すのであり、騙すことによつてしか実在しない。それはすべての読者のなかで、嘘や曖昧さ、ごまかしとかくれんぼの終わりのなき運動と結びついている」と述べることで、嘘や欺瞞の可能性こそが文学の、さらには言語そのものの条件であることを強調したのだった。とするなら、芸術は嘘であるとするパランの言葉が、彼にとってきわめて貴重なものだったことは想像にかたくない。

しかし、パランとブランショは、同じことを述べながら、その筆致はやはり違っている。パランは、ヘーゲルがそうしたように、芸

術のあり方をその歴史的條件に基づいて客観的に記述しようとしている。それに対して、ブランショは嘘と芸術が本質的な関係を結んでいるという発想を、批評家たる自らの立場として積極的に引きつけている。人間には嘘がつけてしまうこと、言語が本質的にフィクションであることは、パランにとって基本的に克服すべき病だった。対してブランショは、現実をありのままに映し出すのではなく、むしろそれを反転させてしまう欺瞞の力、想像的なものへと人をいざなうフィクションの力を、積極的に肯定している。

さて、ブランショがパランにおいて注目していた論点はもう一つあった。「芸術は死そのものとして現れ、死のイメージを私たちのなかに導き入れる」という、芸術と死の関係がそれである。芸術は嘘であり、そして死である。しかしなぜ、これら二つのことが結びぎまに語られているのだろうか。それは、これら二つのことが別々のことではなく、実は表裏一体の関係にあるからではないだろうか。ここで思い出すべきなのは、パランにとって言語と生が根本的に対立していたことである。そしてそれは、言語が充足した生を外側から破壊してしまうもの、つまり生に死をもたらすものだからである。言語が現実を裏切ってしまうのは、つまりそれが本質的に嘘でありフィクションであるのは、それが現実<sup>(24)</sup>に死を与えることだからである。クロソウスキーは、パランにおけるこうした発想に注目して、「死は言語によって私たちの体に導き入れられる。それは言語をして私たちの統一性と堅固さの代償とするためである」と述べている<sup>(25)</sup>。

この点は、ブランショへのパランの影響を考える上できわめて重要である。なぜなら、現実を反転させる嘘（フィクション）の力と生を超越する死の力、パランが芸術と結びつけていたこれら二つの力は、ブランショの四〇年代の集大成的なエッセイ「文学と死への権利」で、文学の本質をなす力としてともども取り上げられているからである。したがって、「文学と死への権利」の議論に、そこで明示的に参照されているマラルメやヘーゲルだけでなく、パランの影響を見て取ることは不可能ではない。そこでブランショが論じている「命名」についても、パランは『言語の本性と機能についての研究』ですでに論じていた。そこでパランが強調していたのは、言語は個別的なものの超越だということだった。実存は命名されることによってその個別性を失う。そしてこれはまた、ブランショが四三年の同書の書評において注目していた論点でもある。「言説は個別的なものや感覚を表現するためのものではない。その役割とは、私を好むと好まざるとにかかわらず、一般的なものへと、論理的意識へと、言説に託されているさまざまな法則の認識へと引きよせることである<sup>(24)</sup>」と、ブランショはパランの議論を要約していた。

パランはまた、「私がこの木、私の家、と言うとしても、私が意味しているのは、私はある木を示している、この家は私のものだ、ということのみである。私はある関係性を意味しているのであり、木や家とその個別性において表象しているのではない<sup>(25)</sup>」と言っている。「この」や「私の」という言葉も、それが言葉であるかぎり、

事物をその個別性において示すことはできない。それは言葉が個物に対する超越であり、したがって本質的に非人称的であるからである。ブランシヨもまた「文学と死への権利」において、ほぼ同じ考えを述べている。彼はそこで、目の前の人間を「この女」と名指すことが、むしろその生身の実存を遠ざけ、その個別性を奪ってしまうことだという逆説を語っている。そしてヘーゲルが語るアダムによる動物たちの命名に言及し、「この瞬間から、猫はただ現実的なだけの猫であることを止め、一つの観念にもなった」と続けている。つまり、実存は名づけられることで個物としては死ぬが、それは言語において普遍性を獲得するということでもある。ブランシヨとパランは正確にこの発想を共有している。とはいえ、ブランシヨがこの観念性、非人称性を言語の条件として積極的に肯定するのに対して、パランは、生きられた現実の直接性を損ねてしまうもの、現実をその個別性において殺してしまうものとして否定的に語るが多いということは、ここで指摘しておくべきだろう。

しかしパランが言語と死の関係をもっと詳しく論じたのは、これよりずっと後、六四年の講演をもとにした「言語と内在性」と題された論文においてである。<sup>(27)</sup>そこでは、ブランシヨとの類似がよりはっきり見て取れる。パランはそこで、「言語は、それが語っている実存を糧としてのみ生きる。言語は死の道具である。ヘーゲルはこの否定の力をよく見ていた。私たちがある事物を名づけるとき、実のところ私たちはそれを殺している。[...]それはもはや木ではな

い。それは概念なのである」と言っている。これはほとんど、ブランシヨが「文学と死への権利」で述べたことそのままである。<sup>(28)</sup>人は事物を命名することでそれに死を与えること、それが具体的事物を観念に変えることであること、そしてこの否定の力を語ったのが誰よりもヘーゲルであること、これらはすべてブランシヨが述べていたことである。こうしてパランとブランシヨは、言語と死を本質的に関係づけることにおいて、きわめて似た発想を示している。クロソウスキーが前掲のパラン論でこの二人の思想的近さを語っているのは、主にこの点に基づいてのことである。彼らは、自然の有機的秩序に死をもたらす否定の力というほとんど同じ図式に基づいて言語をとらえている。

二人の思想の共通項であるこの言語と死の関わりに、一九七一年に逝去したパランの追悼文において、ブランシヨは立ち戻っている。「言葉とは、つねに少しばかりの死である。人が語るのは、実存から人が語っているものと、語っている自分自身とを奪い去ることによってのみである」。<sup>(29)</sup>パランを語りつつブランシヨがこのように述べるとき、これがパランの思想なのかブランシヨの思想なのか、ほとんど見分けがつかない。

### 3. もう一つの生

とはいえやはり、パランとブランシヨは違っている。言語は死で

あることをよく知っていたパランは、それをよく知っていたからこそ、言語に媒介されないありのままの現実に惹かれてもいた。言葉がその対象をつねに裏切ってしまうなら、言葉を必要としない充足した生に帰りたいと望むのは、確かに自然なことだろう。パランはこうした言葉なき生のあり方を、黙々と仕事に打ち込む農夫の生活にしばしば喩えている。したがって、パラんに言語なき生への憧憬があることは確かである。ブランショもまた、その追悼文において、パランの次のような一節を引用していた。「『言語は』さまざまな義務と責任の総体であり、私は眠ることによって、木々を見つめることによって、再び自分のために静寂を作り出すことによって……つまり死と和解することによって、そこから離れて身を休めなければならぬ。死に対する戦いを遂行した後には、私にはそうすることが必要なのだ<sup>(31)</sup>。言語が死の働きによって成り立っているのなら、人が言語を用いるときには、つねに死と格闘していることになるだろう。ここでパランは、その格闘の場からしばし離れ、静寂のなかで休息をとることの大切さを語っているのである。

とするなら、パランの思想はやはり言語（死）ではなく生の側にあるのだろうか。彼は、「言語は道具であるだけではない。あるいはそれが道具だとしても、とりわけそれは、あらゆる道具と同じように、役に立つと同時に暴威をふるうのである<sup>(32)</sup>」と述べ、言語が私たちを虐げる「主人」であることを強調し、そればかりか「この点では原始的にとどまっている私たちの文明において私たちの主人で

ある言語は、いずれ私たちの下僕に変わることだろう。それ以外に神性への道はない<sup>(33)</sup>」と、言語を主人の地位から引きずり下ろすことの希望を語っている。彼はさらに、死後にやってくるだろう生の「復活」を語ってさえいる。「永遠のなかで復活するためでないとしたら、どうして死ぬだろう？」「……生き続けたいと望むなら、生に意味と調和を再び見いださなければならぬ<sup>(34)</sup>」。言葉を用いる私たちは、すでに死を経由している。そのことを認めつつ、パランは私たちが死ぬのは「永遠のなかで復活する」ためであると言う。言語によって疎外された生が蘇ることを、彼は願わずにはいられないのである。このあからさまに神学的な発想もまた、パランの思想であることは疑いえない。

しかし、それでもパランは、言語そのものを否定することはなかった。彼は、言語が私たちを生から遠ざけ、私たちをその普遍的な力によって支配してしまうことが避けえない必然であることをよく分かっており、そしてその必然をはっきり肯定してもいた。「人間は言語を支配することも、言語なしにすますこともできない<sup>(35)</sup>」。だからこそパランは、「思考すること、それは嘘と誤謬のなかで、嘘と誤謬に反対しながら、そこから外に出ようと苦しみながらもごくことだ<sup>(36)</sup>」と言うのである。パランは言語のなかにとどまり続ける。それはそこが居心地がよいからではなく、まったく逆である。パランは言語のなかで、つまりは嘘と誤謬のなかで——ときに休息をとりながら——もがき続けることを選んだのだった。

パランはこのことを、「哲学者」の、つまりは自分自身の役で出演したジャン・リュック・ゴダール監督の映画『女と男のいる舗道』(原題 *Vivre sa vie*) においても、はっきり語っている。アンナ・カリーナ演じるナナが、カフェで偶然出会った「哲学者」と会話をしている場面、彼は「話さないで生きること」について、「それは美しいだろうね。まるで人がもっと愛し合うようにね。でもそれは不可能なんだ。そんなことはできなかったためしがない」と言っている。パランは沈黙への憧憬を漏らしつつ、同時にその不可能性を語る。この彼の両義的な態度については、これまでもたびたび指摘されてきた。事実、サルトルは「しかしパランは、沈黙は、それを名づけ、それを支える言語によってしか意味を持たないことを理解した」とパランにおいて沈黙と言語が不可分であることを指摘し、カミュは「それは実のところ沈黙への道だが、絶対的な沈黙が不可能である以上、それは相対的な沈黙である」と完全な沈黙の不可能性を語っていた。

そしてブランショが、パランへの追悼文において強調するのも、まさにそのことである。ブランショによれば、言語を深く疑い、生を深く愛したパランは、しかし言語の、したがって死の必然性をはっきり引き受けてもいたのである。「ブリス・パランがかつて出会った真の沈黙、彼がそれに出会ったのは、話すことの必然性のなかで、彼が最初は反抗した言葉の、しかし自らの体内にまで必然的なものとして受け入れることを学んだ言葉のなかであると、私は思う」

「結局のところ、ブリス・パランにとって、彼というこの生の人にとって、死はつねにそこにあった」<sup>(40)</sup>。そしてさらに、ブランショはパランのうちに「死によって支配されること、あるいはさらに悪いことに、死の脅威によって、または死の至高性の名のもとに支配されることを妨げるための、ある種の死の使用法」<sup>(41)</sup>を見いだしている。死の支配に抗するためにこそ死を、つまりは言語の支配に抗するために言語をというこの要請に、パランはどこまでも忠実だったと、ブランショは言うのである。

したがって、パランは実存と言語、生と死のどちらかだけを選んではしまうことを拒み、むしろそのあいだで引き裂かれていることを選んだ。ブランショのパラン論が描き出すのは、彼のそのような姿である。そしてパラン自身もまた、次のように語っている。「私たちは自分のなかに二人の人物を発見する。息をしたり、食べたり、飲んだりする者と、話す者である」<sup>(42)</sup>。「私は自分が二重であると感じている。一人は犬あるいは猫に似ていて、身振りだけで話すことなく生きることが出来る。もう一人はおしゃべりで、真心のこもった言葉や役に立つ情報を隣人たちと交わして幸せである。これら二人は同一の者ではない。おそらくは死の側面があり、そして生の側面があるのだ」<sup>(43)</sup>。人間は実存と言語の、動物と人間の、生と死の二つの側面のあいだをたえず揺れ動いている。話す者はこうしてつねに二重の存在である。『女と男のいる舗道』で、パランはこのことについてもしっかり語っている。



パラン…思うんだけど、人が話すことができるのは、しばらく生きることをあきらめたときだけなんだ。ほとんど代償のようなものだね。

ナナ …じゃあ話すことは命がけ (mortal) なのね。

パラン…話すことは生に対して、ほとんど復活なんだ。つまり、話しているときは、話していないときとは別の生なんだ。分かるかい？ 話しながら生きるためには、言葉のない生の死をまず通ってこなければならぬ。

言語は私たちの生に死をもたらす。それゆえにこそ、私たちはつねに言葉とともに、つまりは死とともにあることを、パランはここでははっきり語っている。「同時に話すことと生きることはできない」とも言っていたパランは、ここでは「話しながら生きることに」について語っている。「話しながら生きることに」。この何気ない表現は、パランにとっては重いものであるはずである。なぜならそれは、彼にとって、生と死という相容れないはずのものの同時性を意味しているのだから。話しながら生きること、それは生を損なってしまいうるしき言語(死)と言語なき幸福な生という対立を越えて、言語とともに、死ともにもあるもう一つの生を肯定することではないだろうか。永遠のなかでの復活を語っていたパランは、ここでも復活を語りながら、しかしそれは死とともにある復活、したがってクロソウスキーが「私たちの死はまさに名を存在させるものだ。なぜなら言

語は固有のものとして私たちに属してはいないのだから、そして私たちの体が消え去った後に、別の体を見つけるだろうから」と語っている、この死を経由した「別の体」の復活ではないだろうか。私たちは言語とともにあるとき、すでにもう一つの生に、死後の生に入り込んでいる。

実のところ、パランがこのように引き受けた生と死の特異な関係は、ブランショにおいてもまた大きなテーマをなしている。しかしその議論を追う余裕はすでない。ここでは、この生と死の関係をめぐる思考が、パランとブランショの両者において、何よりも言語についての考察から導かれたものだったという事実を確認して、ひとまず稿を閉じることにしたい。

#### 注

- (1) 「研究者によって」と限定したのは、ジャン＝ポール・サルトルとピエール・クロソウスキーが、それぞれ四〇年代に発表したパラン論において、パランとブランショの思想が似通っていることを指摘しているからである。本稿でも彼らの指摘は大きな助けとなっている。 Cf. Jean-Paul Sartre, « Aller et retour » (1944), *Critiques littéraires (Situations II)*, Gallimard, 1947, coll. Folio essai, pp. 175-225; Pierre Klossowski, « Le langage, le silence et le communisme » (1949), *Un si funeste désir*, Gallimard, 1963, coll. L'imaginaire, pp. 127-150)。

しかしそもそも、今日パランが論じられること自体が少ない。ブランショが後年、『友愛のために』のなかで「皆が尊敬しており、その言語につい

- ての諸命題が見事に新しい時代の幕開けとなったプリンス・パラシ」と述べている(『Pour l'amitie, Fourbis, 1996, p.15』)‘かつてパラシの思想が比類ない存在感を示していた時代があった。しかしそうした時代は、いわゆる構造主義がフランスの知的状況を席巻するにつれて終わりを迎える。こうした時代によるパラシ受容の変化については以下の文献を参照。Pierre Pachet, « Du jour au lendemain: les raisons d'une désaffection », *Brice Parain: un homme de parole*, Gallimard / Bibliothèque Nationale de France, 2005, pp.157-166.
- (2) Brice Parain, *Recherches sur la nature et les fonctions du langage*, Gallimard, 1942, coll. Idées; *Essai sur le logos platonicien*, Gallimard, 1942. 以下は「*レ・ロジ・プラトニク*」エッセイ・ミルレーンの指導のもとに提出された博士論文とその副論文である。
- (3) この書評は同年刊行された評論集『踏み外し』に再録された。Maurice Blanchot, « Recherches sur le langage », *Faux pas*, Gallimard, 1943, pp.102-108.
- (4) *Ibid.*, p.102. このパラシの指摘は、『プラトンのロギスについての試論』の序論を踏まえたものである。とはいえず、そこでパラシが現代の「危機」を語るときに参照しているのは実は数学である。パラシは、「パラシとローランを結びつけることで、その指摘を文学批評家としての『心の近さ』(『*レ・ロジ・プラトニク*」)の関心に近いことである。
- (5) *Essai sur le logos platonicien*, op. cit., p.86.
- (6) *Ibid.*, p.134.
- (7) *Ibid.*, p.147.
- (8) パラシは四十六年に発表されたマラルメ論において、「あらゆる語は固有名でさえ、マラルメという名でさえ、個別の出来事ではなくその出来事の一般的形式を指し示す。語はどんなものであれ、一つの抽象化にとどまる。これは少なくとも、プラトンが私たちに教えたことである」と述べているが(『*Le mythe de Mallarmé*», *La Part du feu*, Gallimard, 1949, pp.37-38)‘これはパラシのプラトニ論を念頭に置いて書かれたものだから。
- (9) *Essai sur le logos platonicien*, op. cit., p.155-156.
- (10) *Ibid.*, p.164.
- (11) *Sur la dialectique*, Gallimard, 1953, p.103.
- (12) これはほとんどローランが語っていたテロリストの言語観そのものであり、事実ローランはこの点でパラシを批判している。同じ言葉がときに対立するやちやまな内容を含んでしまったりに気づいて「それらの言葉をやっかにはせられよう、緒に言語全体を断罪する」(ローランのナイーヴさを、ローランは指摘している (Jean Paulhan, « Petite préface à toute critique », *Œuvres complètes*, t. 2, Cercle du livre précieux, p.301))。
- (13) *Recherches sur la nature et les fonctions du langage*, op. cit., p.182.
- (14) *Sur la dialectique*, op. cit., p.61. 本文の以下の記述は同書同ページ以下に基づいている。
- (15) *Essai sur le logos platonicien*, op. cit., p.146.
- (16) *Sur la dialectique*, op. cit., pp.80-81.
- (17) 「それは病んだ言葉を抱えた言語だ[.]彼がこれらの言葉の上に身をかがめるのは、生物学者としてではなく医者としてである。このことの意味は、彼には諸器官を切り離して実験室のなかで調べる気がないということである。彼が研究し、治せようとするのは有機体全体なのである」(Sartre, « Aller et retour », art. cit. p.180)° サルトルのこの指摘は「*レ・ロジ・プラトニク*」で「言語がいわば健康な身体を襲う病として理解されていることを教える。パラシ自身も、言語を身体に外部から侵入する細菌やウイルスに喩えている (Cf. *Petite métaphysique de la parole*, Gallimard, 1969, p.135)°
- (18) *Entretiens avec Bernard Pingaud*, Gallimard, 1966, p.26.
- (19) このパスカル論は評論集『火の部分』に再録されている° 「*La Main de Pascal*», *La Part du feu*, op. cit., p.254.
- (20) « Critique de la dialectique matérialiste », *L'Embaras du choix*,

Gallimard, 1946, p.141.

- (21) « Le mythe de Mallarmé », art. cit., p.47.
- (22) « Les romans de Sartre » (1945), *La Part du feu*, op. cit., p.189.
- (23) « Le langage, le silence et le communisme », art. cit., p.138.
- (24) « Recherches sur le langage », art. cit., p.105.
- (25) *Recherches sur la nature et les fonctions du langage*, op. cit., pp.42-43.
- (26) « La Littérature et le droit à la mort », *La Part du feu*, op. cit., p.312.
- (27) 『言葉の小形而上学』に補遺として収められた論文。 « Le langage et l'immanence », *Petite métaphysique de la parole*, pp.133-153.
- (28) *Ibid.*, p.142.
- (29) ただこの論文にはナンミンの言及もあるが、ナンミン自身がナンミンの意識や意識のつらさの可能性を高めた点。
- (30) « Une Nouvelle Raison ? », *Nouvelle Revue Française*, n°223, juillet 1971, p.96.
- (31) *Petite métaphysique de la parole*, op. cit., pp.33-34, cité par Blanchot, « Une Nouvelle Raison ? », art. cit., p.97.
- (32) *Petite métaphysique de la parole*, op. cit., p.138.
- (33) *Sur la dialectique*, op. cit., p.135.
- (34) *Petite métaphysique de la parole*, op. cit., p.153.
- (35) *Retour sur la France*, Grasset, 1936, p.16.
- (36) *Petite métaphysique de la parole*, op. cit., p.33.
- (37) « Aller et retour », art. cit., p.212.
- (38) Albert Camus, « Sur une philosophie de l'expression » (1944), *Oeuvres complètes*, t. 1, Jacqueline Lévi-Valensi (ed.), Gallimard, coll. Bibliothèque de La Pléiade, 2006, p.908.
- (39) « Une Nouvelle Raison ? », art. cit., pp.99-100.
- (40) *Ibid.*, p.101.

(41) *Ibid.*

(42) *Petite métaphysique de la parole*, op. cit., p.140.

(43) *Ibid.*, p.28.

(44) « Le langage, le silence et le communisme », art. cit., p.139.

\* 本稿は二〇〇八年度早稲田大学特定課題研究助成費（課題番号：二〇〇八A-八二八）による成果の一部である。